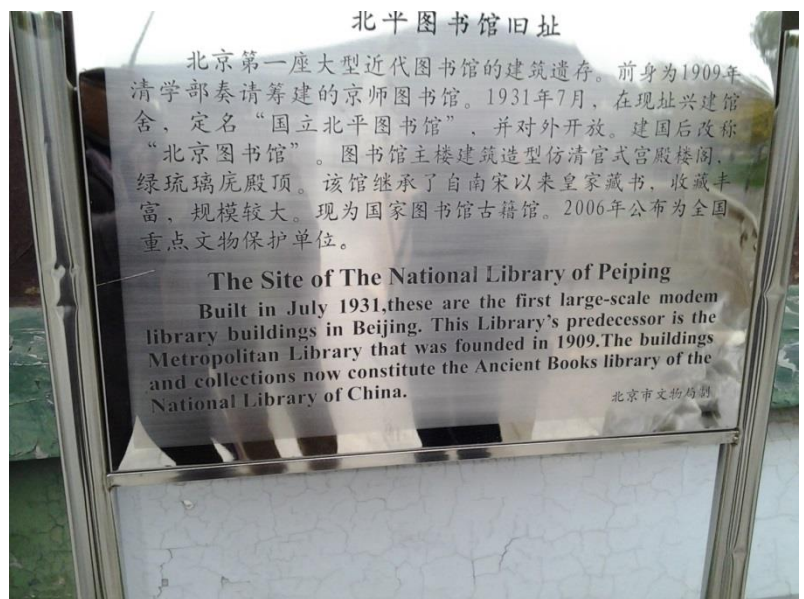




<中国国家図書館古籍部建物>

東北大震災以来、水損資料の真空凍結乾燥後のドライクリーニングに関わってきた。その中で、本などのページが固着して、開くことが出来ないケースがいくつかあり、その処置が懸案になっていた。何枚もの紙の束がまるで糊で貼りつけられた分厚い板ようになっており、手の施しようもない状態であった。

これらの処置に関して色々方策をインターネットで調べていた所、偶然にも上記周氏のレポートを見つけた。レポートは日本語（PDF）で書かれており、何年に掲載されたレポートかも不明であったが、その内容には私たちが探している方策へのヒントになりそうな事柄が記載されていた。周氏のレポートによると、『趙城金藏』という大蔵經の一種（1148～1173）が長い間劣悪な環境（石炭を保管した穴倉）に置かれていたため、湿気とクロカビでまるで木炭のような状態であったものを 1949 年より約 16 年かけて修復した、との報告である。昨今、コンサーベーションサイエンスという名のもとに、文化遺産修復の技術は非常に進歩し、この分野も他の分野に負けず劣らずハイテクへハイテクへと進む中、資料を豚まんやシュウマイのように「蒸す」、といロウテクさに目からうろこのおもいであった。



丁度そのような折、タイミングよく中国図書館視察の計画があり、同行させて頂いた。周氏が現在も国家図書館に在職なのかどうか分からない状況ではあったが、とりあえず出かけることにした。北京では国家図書館、北京大学図書館、首都図書館等いくつかの図書館を見学することが出来た。

周さんにお会いする。

私は通訳の陳さんを通じて国家図書館の方に、「周氏が今も在職であるかどうか」と「在職なら北京滞在中にお会いすることが出来るかどうか」の確認をお願いしたところ、周氏は現在も在職で、会ってくださることになった。又運よく、同行して下さる別の通訳、劉さんを旅行社から紹介して頂くことが出来た。

10月21日、同行の方々が万里の長城へ向かわれるのをホテルで見送り、私は劉さんの連絡を待った。約束の午後1時きっかりに劉さんはフロントから電話をくださり、私達はタクシーで国家図書館古籍部へ向かった。国家図書館古籍部はもともとの図書館（京師図書館・1930年建設）の建物で、現在の国家図書館の分館として主に古書類の所蔵と修復関連の施設となっている。周氏のお話によると、古書類の所蔵と云っても、貴重書レベルの物は新しい建物の国家図書館に保管されているとのことだった。

約束の時間は午後2時であったが、北京の道路事情を考慮し、余裕をもって出かけた私たちは約束の時間の15分ほど前に目的地へ到着することが出来た。そこは旧市街地で、故宫博物院にほど近く、立派な門構えの両脇に衛兵の警護する古くて重厚な建物で、一般の人は入れないとのことだった。劉さんがあらかじめ聞いておいた周さんへ電話を掛けるとほどなく、広い中庭の向こうから周さんが足早に私たちのところへ向かって来られた。私はにわか勉強の中国語で「你好」とあいさつし、「我是板倉正子」（私は板倉正子です）と云った。私たちは促されて、周さんの事務所へ通された。通訳の劉さんが今回の訪問の意向を伝えると、周さんはまずお茶を準備して私たちに勧めてくださった。お茶の葉を直接紙コップに入れ、お湯をそそぐ、という中国スタイルだった。

周さんのお話

周さんはまず中国の製本構造の歴史の変遷について、実際に紙を折り曲げながら説明して下さった。私は、そのあたりの事は既にかなり知ってはいるので、早く話題を「蒸す」内容に持っていきたかったが、周さんのお話は途切れなく続いた。



次にお話は、中国国家図書館修復部の組織構成にうつり、周さんは文献保護部門のトップのポストであることが分かった。善本部門（善本は貴重書のこと）は修復部門と文献保護部門に分けられ、文献保護部門では保存全般、修復技術ノウ

ハウの研究などを担当するということである。

私はメモをしたり、動画をとったり、「腕がもう1本あったら」ともどかしく思いながら劉さんの通訳を一言漏らさず聞き入った。わかりにくいところは時々劉さんにノートに漢字で書いてもらったりして、出来るだけ正確に理解するように努めた。同じ漢字でも中国と日本では発音も異なり、又意味も異なることが多々あるので、この辺りはきっちり聞いておかないと間違った情報が伝わってしまうことになるので、注意が必要だ。

中国の保存計画

周さんのお話では、今後100台のリーフキャストを国内で製作し、主だった図書館に配置する計画があるが、まだそれを指導できる人材の育成は出来ていない、とのことであった。

それから周さんは、リーフキャスト方式ではなく、中国古来の裏打ちについて説明をされた。これは大変興味深いもので、日本とはだいぶ方法が異なっている。日本では、虫食いなどで傷んだ一枚物資料を、裏から薄い和紙を糊付けして補強する「裏打ち」という方法があり、その場合、裏打ちしていることがはっきりとわかるように、裏に貼りつけた紙を本紙より周囲5ミリづつほど大きく残すのが一般的な方法である。中国の場合はその台紙となる紙を3～4センチ大きく残している。しかも、台紙となる紙は少々厚く、しかも新しい真っ白な紙である。古い本紙の方は経年で古びて黄ばんでおり、台紙の白さがいやに目立っている。

この現物は、ちょうど国家図書館本館で見学した、修復の展示会で見ていたので、周さんのお話がよくわかった。周さんの話によると、台紙を大きくするのは本紙を傷めないようにということ。台紙に白い紙を使うのは、台紙の白を銀色に見立て、本紙の黄ばんだ色を金と見立てて、「金鑲玉・キンシャンユイ」となづけ、それを美しい、とする中国人の美意識からきているらしい。北京オリンピックの金メダルもそのようになっているという周さんのお話に、後で調べると、確かに、金メダルの裏側に薄い翡翠がはめ込まれていた。その方法が適切かどうかはさておき、お国の違いというものに感心した。

通訳、劉さんの時間の都合もあり、私は焦る気持ちで「蒸す」話を聞きかけたが、周さんは「その方法は中国古来のもので、ものすごく時間がかかります。何度も何度も蒸しながら、一枚づつ根気よく剥がしていくのです。」と云ったきり、話は又別の方向へ流れて行った。私はこの話はじっくりとお聞きする必要がある、今回の時間では足りないと思い、周さんに「又来年来ます。」といった。劉さんが又通訳として同行してくれるなら、何度でも来て、ゆっくりお話を伺うことに決めた。

周さんの話は、私の知りたい方向とはどんどん離れ、周さん自身の懸案事項へと進んでいった。現在国家図書館には、16世紀以降キリスト教の伝播とともに入ってきた、スペイン、ポルトガルのたくさんの書籍が残っており、それらの修復が手つかずで残されているという。しかもその書籍群は、本国では現存している物がほとんどなく、両国はその返還を願っているということである。

中国には洋書の修復技術はほとんど無く、さりとて変換することも選択肢にはないらしい。この話は大変興味をそそられたが、如何ともしがたく、「私にこのプロジェクトを任せてください」と云いたい気持ちを呑み込んだ。



それから周さんは私たちを作業室へ案内してくれた。部屋はかなり広く、作業机が4つづつ島型に3か所配置されており、若い日人達が向き合って、作業を行っていた。その他にも、机や、プレスや紙タンスなども置かれ、導線もよく配慮されているのか通路の部分が広くとってあった。

破れたり傷んだ資料を紙で繕っているところは日本とあまり変わらないが、その技量は日本の方が上かな、と思った。技法の詳細や、接着剤についてもたづねたかったが、劉さんの時間の制限を考えると、「とにかく来年」にしようと考えた。劉さんには夕方の仕事があり、3時半まで、と旅行社の上司から言い渡されていたのに、彼は「4時までは大丈夫」と言ってくれた。と言っても本当に大丈夫なのか私には気が気ではなかった。



そうこうしているうちに時間は4時になってしまった。龍さんは修復の世界に大変興味を持ったようで、「まだもう少し大丈夫です」といつてくれたが、このために仕事を失うようなことになれば大変と、私達は周さんにお暇を告げて古籍部を辞した。

帰り、その日は金曜で道路はいつにもまして大渋滞で、私達はタクシーを捕まえることが出来なかった。劉さんはとても気遣ってくれたが、私は「大人だからバスでも帰れます」と云って、結局私たちは路線バスで帰った。バスの中で劉さんは、前日見つけたという国家図書館の修復の様子をユーチューブで見せてくれた。

文化遺産を残し、後世に伝えることはどの国の人にとっても大切なことである、と強く感じた。その存在を、戦争や災害や政治情勢の変化におびやかされることがあっても、絶え間ない努力で引き継いでいくことは修復に携わる人の役目である。自分の年を考えると後どれだけ働けるのかはわからないが、出来るだけ多くのことを若い人たちに伝え、今後を託して行こうと新たな決意が湧いた。